



神奈川県立 生命の星・地球博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

友の会通信

124

2024.06

Vol.28 No.1 通巻124号 2024年6月15日発行(年4回発行)



上：友の会総会での役員紹介

下：ミューズ・フェスタでの友の会紹介

2024年度友の会事業について

今年度も、友の会では多くの講座を企画しています。

また、この友の会では会員自らが講座等を企画することが大きな特徴です。

興味のある講座への参加や、「こんな観察会をやりたい」「こんなことを専門家に聞いてみたい」などありましたら、ぜひ友の会を通して実現していただければと思います。

目次

ご挨拶	2
事務局より	3
情報クリップ	3
活動報告	4
行事案内	10

今年度もよろしく申し上げます

会長 鈴木智明

新たな年度が始まりました。皆さまはいかがお過ごしでしょうか。今年度も今まで同様に、友の会活動へのご協力、ご支援をよろしくお願いします。



さて、昨年度はようやくコロナも落ち着き、行事の方も31講座（雨で1講座中止）910人の方にご参加いただきました。会員数も380名弱と多くの方にご入会頂いております。ありがとうございます。

そうした中、引き続き検討すべき事項としては友の会の新陳代謝を組み込んだ持続的な運営の実現だと考えています。私も2010年に会長になってから早いもので14年が立ちましたが、他の多くの役員も同様に長期間友の会運営に携わって頂いております。もう少し特定の人に依存しない形での運営方法は無いものか、悩んでいるところです。また、講座の申込み方法も一部ネットから実現したところですが、こちらも今のデジタル社会に即したものとなっているのか、また、この通信による会員の皆さまとのコミュニケーションのやり方も今のままで良いのか、などなど。

友の会も1997年発足なので、もう20代後半となりました。今一度、運営のあり方を検討し、いつまでも皆が楽しめる友の会を目指したいと思います。

今年度もよろしく申し上げます。

ご挨拶

館長 田中徳久

昨年（2023年）6月に館長に就任し、1年が経過しました。この1年間、友の会会員の皆様はいかがお過ごしでしたでしょうか？昨年5月には、新型コロナウイルスの感染症法上の



位置づけが5類となり、ウィルスがすべて消え去ったわけではないものの、ほぼ普通の生活に戻られましたでしょうか？友の会の各種活動もコロナ以前の活動にほぼ戻ったように聞いています。そんな平穏の日々ですが、海外に目を向けると、ロシアとウクライナの問題やイスラエルとハマスの中東情勢など、不穏な日々が続いています。国内でも、今年のお正月早々、1月1日には、能登半島地震が発生し、今でも多くの方々が避難生活を送り、被災地の復興も道半ばです。また、その翌日の2日には、羽田空港で日本航空機と海上保安庁機の衝突事故が発生し、日本航空機の乗員・乗客は無事だったものの、海上保安庁機の乗員5名が亡くなりました。半年以上が経過した事案ではありますが、亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々にお見舞い申し上げます。

このような地震や事故・事件が発生すると、当館が開館した1995年にも、1月17日に阪神淡路大震災、3月20日は地下鉄サリン事件が発生（この日は当館の開館記念式典当日）したのを思い出します。そんな年に開館した当館も、来年（2025年）の3月20日には、開館30周年を迎えます。それを記念し、今年の夏の特別展は、30周年記念特別展として、「生命の星・地球博物館の30年—120万点から厳選した資料で振り返る—」と題し、7月13日（土）から11月4日（月・祝）に開催されます。博物館とともに歩まれ、日夜博物館を支えて頂いている友の会の会員の皆様も、ぜひ観覧いただき、博物館の30年を体感いただければ、と思います。

30年はひとつの区切りであるとは思いますが、当館は、なお一層、「集める」「調べる」「伝える」の博物館の基本的活動を充実させ、40年、50年先、100年へと活動を続けて行きます。友の会のみなさまも、そんな博物館の活動に寄り添い、応援いただき、ともに歩んでいただければと思いますので、よろしくお願いします。

なお、当生命の星・地球博物館は、2022年4月に改正され、2023年4月に施行された改正博物館法に基づき、2024年3月14日づけで、登録博物館として本県の博物館登録原簿に登録されましたことを、最後になりますが報告させていただきます。

事務局より

2024年度第28回友の会総会の開催

2024年4月28日
13時より、博物館
講義室にて第28回
友の会総会が議案書
に基づき開催されま
した。

まず、2023年度の
事業報告で、博物館
との共催事業とし
て、3月9・10日に
行われた「ミュー
ズ・フェスタ

2024」と昨年度は6回開催された「よろずスタジ
オ」、事務局としては役員会の開催や昨年度の総会
及びイベントの報告、広報部の活動として友の会通
信の発行やブログによる情報発信についての報告が
ありました。

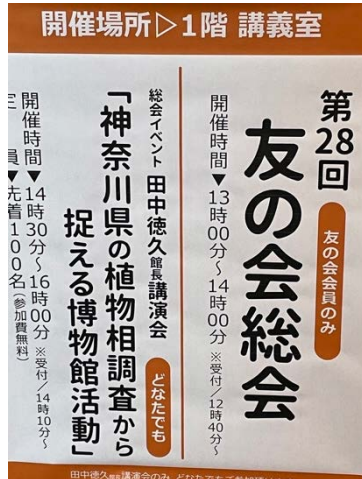
行事については、サロン・ド・小田原の2回が抜
けていたとの指摘を受け、追加しました。

決算報告では、今まで別会計で管理していたサロ
ン・ド・小田原を組み込んだこと、などが報告され
ました。

新年度の役員については、植物グループが浅川さ
んから近田さんに交代となり、また博物館の友の会
担当では樽学芸員から夏目学芸員へ変更となりまし
た。

新年度の事業計画については、事務局は例年どお
り、講座は31事業となり、予算案含め、ご承認い
ただきました。

なお、今回より総会直後での報告書の郵送は行わ
ず、ブログにてまずはお知らせし、6月の発送時に
紙での報告書を郵送することとしました。



情報クリップ

友の会会員数：315名（5月15日現在）
正会員：312名／賛助会員：3名

●博物館人事異動

2024年3月16日付

<管理課>

新規採用：仲手川 則子

2024年4月1日付

<副館長>

転 入：大河原 邦治

転 出：渡辺 雅己

<学芸部>

異 動：松本 涼子（両生類・爬虫類担当／
前・企画普及課兼務）

新規採用：和田 英敏（魚類担当）

：夏目 樹（地学担当）

<管理課>

転 入：小林 優宏

新規採用：鈴木 若菜

転 出：廣瀬 綾乃

<企画情報部>

転 入：芳賀 洋一（企画情報部長）

転 出：植村 良彦（前・企画情報部長）

<企画情報部 企画普及課>

異 動：渡辺 恭平（学芸部兼務 昆虫担当）

<学習指導員>

新規採用：川島 祐輔

●退職

2024年3月31日付

瀬能 宏（前・魚類担当）

下出 朋美（前・地学担当）

田村 靖（前・管理課）

高橋 正人（前・学習指導員）

2024年4月30日付

三橋 秀子（前・企画普及課）

●2024年度 友の会担当職員のご紹介

山下 浩之、荻部 治紀、夏目 樹、本杉 弥生

活動報告（サロン・ド・小田原）

◆第139回サロン・ド・小田原

「未知の魚を求めて～私の採集遍歴」

2024年2月17日（土）／博物館 SEISA ミュージアムシアター／95名／講師：瀬能学芸員



今回の話題提供者 瀬能宏学芸員

今年度2回目のサロン・ド・小田原は、この3月で博物館を退職される瀬能学芸員による講演です。長年に渡る活動をされてきた瀬能学芸員ですが、今回はこれまでに経験してきた採集や印象に残っている魚について、お話したいただきました。

京都や沖縄、伊豆海洋公園での調査などのお話がありましたが、私（鈴木）としては、1993年から博物館（開設準備室）に伊豆高原から通われた時期に魚類写真データベース構築の関係で一緒に仕事をした記憶がいまだに強く残っています。魚だけでなく、色々なものを集めている瀬能さんですが、その当時でなければ集められないものがあり、特に自然環境は今より良くなることはありえない、なので今の自然を記録できる博物館は大変重要である、といった話に頷くばかりでした。（鈴木智明）



講演会風景

活動報告（総会イベント）

◆田中徳久館長講演会

「神奈川県植物相調査から捉える博物館活動」

2024年4月28日（日）／西側講義室／36名



講師の田中徳久館長

今年の総会イベントは講演会です。昨年6月館長に就任されました田中館長に、ご講演をお願いいたしました。田中館長は友の会活動にいつもご支援をいただいていた、特に植物グループは、大変お世話になっております。

田中館長は2015年に「標本データベースを活用した神奈川県の地域植物相の特徴と多様性」で博士の学位を取得されています。今回はこの学位論文の下地になりました『神奈川県植物誌1988』『同2001』『同2018』の編纂について様々な角度からお話いただきました。神奈川県は最も植物相が調査されている都道府県のひとつです。またこの調査が広く市民との協働で行われ、成果をあげていることを強調されていました。さらに全植物の分布図を掲載し、証拠標本を集め、博物館に収蔵していて、その苦労なども伺いました。またNHK朝の連続テレビドラマ「らんまん」の牧野富太郎氏博士の逸話を披露いただきました。参加者が少なく残念でしたが、中身は濃く博物館活動を知るよい事例でした。田中館長、ありがとうございました。（関口康弘）



講演会風景

活動報告（地学グループ）

◆地話懇話会

「近年の調査航海報告」

2024年1月24日（水）／博物館西講義室／14名／

講師：山下学芸員



講師の山下浩之氏

今回は参加者に疑問などを質問してもらい、講師の方にその答えと関連する事項について話をして頂く、「質疑応答形式」で進行されました。開始時刻が14時00分から繰り上げられたので、終了時刻にはゆとりのある対応ができたようです。

今回の講演は、フィリピン海で複数回実施された調査航海の報告。海底に露出する岩石の採集状況など、調査活動に関する概要を、動画などを活用して紹介して頂く事に。調査船、船上生活の様子、潜水調査船での潜航の様子なども紹介されました。

フィリピン海はフィリピン海プレートそのもの。フィリピン海プレートは、長い時間をかけて変化してきた。海底は複雑な形状、海域や水深の違いなどにより大きく異なっている。プレートは、その中央を九州から南洋のパラオ諸島まで連なる海底山脈、九州ーパラオ海嶺によって東西に二分されている。海嶺の西側が西フィリピン海盆、東側は北が四国海盆、南がパレスベラ海盆である。四国海盆の東端には伊豆・小笠原弧が位置している。プレートの古い部分は、西フィリピン海盆に存在している。

約5600万～3400万年前から始まる拡大、約1500万年前からはプレートの北上に伴って、西フィリピン海盆や四国海盆が、南海トラフに沿って沈み込みを始めた。伊豆・小笠原弧は沈み込めず、現在の南部フォッサマグナの位置で、本州に衝突し

始めた。この衝突によって、現在の日本列島が形づくられてきている。

調査海域へは調査船で、乗船したのは「よこすか」や「白鳳丸」。岩石の採集は、ドレッジ調査や潜航調査などで。ドレッジ調査では海底を浚い、土砂や岩石などを掻き寄せて収容する。潜航調査で乗船したのは潜水調査船「しんかい6500」、遠隔操作で岩石を掴み採って収容する。潜航時間は8時間なので、潜水と浮上を除いた時間が調査活動となります。下船は、次の研究者達と交代の為に、那覇、或いは父島に寄港する時も。父島では定期船の運航日の関係で島巡りも出来ました。

近年、技術の進歩や設備の発達などにより、海底の様子が明らかに成りつつある。フィリピン海プレートにもドーム状の地形、「メガムリオン」と呼ばれている地形が複数分布している、のを確認。メガムリオンは、低速度拡大している大西洋中央海嶺の周辺から見つかっています。メガムリオンからは、プレートを構成している玄武岩が少なく、地球内部を構成している、かんらん岩や斑れい岩が多数採集されています。地球の内部を研究する上でも、重要視されている岩石であります。

地球は誕生してから、絶えず変動をし続けているが、その多くは謎のままである。技術の進歩や設備の発達などにより、謎だった事が解明されてきているが、そこにはまた、新たな謎が現れてくる事も。私が見聞できるのは、判り易く発表された新たな知見だけである。そこに至る調査研究はなかなか見えてこない。今回は、こうした研究者達の挑み続ける姿が、垣間見られた様な気がしてきました。「ゴジラメガムリオン」が海底地形として承認された事も含め、新たな知見となりました。新たな思考を導き出してくれて、知識が深められて、感動溢れる有意義な懇話会でありました。（石塚富美雄）



地話懇話会情景

◆地話懇話会

「真鶴・湯河原地区採石丁場跡の考察」

2024年3月27日（水曜）14:00～15:30／博物館西
講義室／20名／渡部 孟氏（箱根ジオパークガイ
ド）／20名／



講師の渡部 孟氏

今回の講師・渡部 孟さん。実は、真鶴半島の突
端にある真鶴町立遠藤貝類博物館の初代館長さん
で、海の生物について造詣の深い方です。その生物
の先生が何故か石の研究にはまり込んでしまい、今
では人前でお話ができるほどの研究成果を上げてい
られることを知り、今回の地話懇談会の運びとなり
ました。

お話は多岐にわたり、石切り場跡からこんなにい
ろいろなことが分かるのかと興味津々で聞かせて頂
きました。

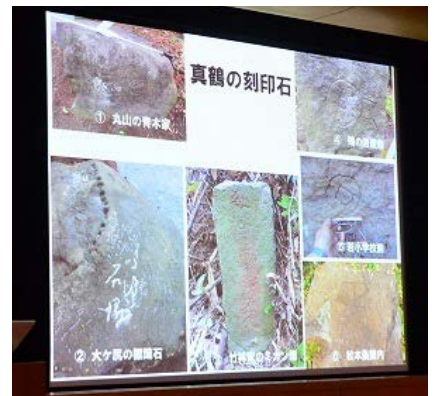
真鶴の
石丁場
は、山中
にも海岸
線にも存
在し、採
石した時
代によっ
てもその
特徴を見
ることが
できるとの



石切りに使われた矢穴の跡

ことでした。例えば、矢穴の大きさで、13 cm～14
cmは江戸初期のもので木のクサビの跡。6 cmは江戸
後期のもの。4～5 cmは江戸末期のもので、鉄製の
クサビを打った跡と分かるとか。

また、掘り出し
た石に刻印が残る
ものがあり、例え
ば○の中に□の印
は裏銭紋と呼ば
れ、福岡藩黒田家
が担当した石の証
とのことでした。



刻印石

特に興味深かつ
たことは、真鶴半

島先の西側にある番場浦海岸の石切り場の紹介でし
た。海岸に石切りの跡が残るが、矢穴の跡が見られ
ず、ツルハシなどで刻み取った石切り工法が使われ
たものとみられ、比較的新しい丁場と考えられた。
この海岸で、平田船から大きな石船へと石材を運搬
した方法の考察が特に面白かった。この海岸にはポ
ットホールと言われる大きな円柱状の穴がいくつも
岩に穿かれている。この穴が石を船に積み込むとき
に使われた木製の大型クレーンの柱を支えた穴では
ないかという発表があ
った。その説明に自作
の模型クレーンを使っ



て演示して見せていた
だき、大いに納得する
ことができた。 湯河
原の採石丁場跡につい

ては、「土肥鍛冶屋村絵図面」（文政7年）から小田
原藩の本丁場があったことなど複製図を用意して頂
き身近で観察させてもらった。

最後の質疑応答タイムでは会場から多くの質問が
あり、渡部先生には丁寧に回答していただきました
。（飯島俊幸）



講演後の質疑応答の時間

活動報告（よろずスタジオ）

◆「溶岩の噴火」

2024年2月18日（日）／博物館東講義室／61名
（大人35名、子ども31名）／担当：西澤学芸員
／スタッフ：4人

はじめに先生から火山噴火では溶岩のほかにガスや火山灰などが出てくると、また火山の地下深くにはマグマだまりがあることなどのお話を聞いた後、いよいよ溶岩の噴火実験開始です。



火山のお話を聞く

一人一人に準備された用具は透明なカップ、小さな穴が開いている蓋、また溶岩になる材料として酢、洗濯糊、重曹の3つ。用具と材料を前に先生から実験の仕方の説明を聞き、入れる順番や量、入れ方などの注意点を守りながら材料を慎重に入れていき、全部入れ終わったら蓋を静かに閉めます。

さてどんなことが起こってきたかな？の問いかけに、蓋を閉めたカップの中の様子を目を丸く輝かせていた子供たちからは、「泡が出てきた」「ぶくぶくしてきた」「ぽとぽと垂れてきた」の声。なかなか泡が出てこなかった子はちょっと不安そうでしたが時間がたつと同じようにぶくぶくとしてきてほっと安心、満足の笑顔。



こぼさないようにそっとだよ



あ、ぶくぶくしてきた！

噴火実験が終わると先生からもこもこ、シュワシュワ出てきたものは溶岩です。実際の火山でシュワシュワ噴き出してくるもと（揮発性分）はマグマの中に含まれている水です。そして水を含んだマグマの圧力が低くなると一気に水が膨張して溢れ出てきます。これが溶岩です。

実験では溶岩はカップの蓋の穴から出てきましたが、実際の火山にも溶岩が出てくる穴があります。火口といいます。

この博物館のある位置は箱根火山の中にあり、また博物館の周辺は溶岩が流れて固まった地形というお話もしてくださいました。

最後に溶岩や軽石の観察をして終わりです。博物館に収蔵されている火山の噴出物、小さな穴がいっぱい開いている溶岩や白くて丸い形をした軽石などを、触ったり持ちあげたりして感触を確かめていました。（佐々木あや子）



岩石の標本を前にお話を聞く



軽石を持って「うわー、かるい！」

◆「ほねほねクイズ・この骨だあれ？」

2024年4月14日(日)／博物館東講義室／36名
(大人18名、子ども18名)／担当：鈴木学芸員
／スタッフ：4人

今年の春は気温が低くゆっくり進行していて、箱根の山肌はまだ色とりどりの桜で覆われています。今日は久しぶりの晴れの週末、「お客さん少なそう」というスタッフの予想通り、一回目(30分毎入れ替え制)はたった一組の参加、鈴木学芸員も拍子抜けの体で、2024年のよろずスタジオは始まりました。「ほねほねクイズ」は昨年好評でしたので、今回も同じ内容での実施です。扱う動物も昨年と同じ、アナグマ、タヌキ、ハクビシン、ノウサギの4種。参加の一組のご家族は、4種の剥製、骨格標本を独り占めですから、動きも自由、時間もゆったり使って、プログラムに真剣に取り組んでくださいました。帰りには「楽しかった～、ここにきて良かった～」との感想で、スタッフも笑顔になりました。

今回は結局全部で10組という少なめの参加者でしたが、小学生の参加者が多く、普段は見られない骨の形や組み合わせを実体験できたことに、それぞれ満足の様子でした。

ウサギは長い耳を持っているが、中に骨はないので、骨格標本の様子はだいぶ違う事、草を食べるのに便利な前歯を持つこと、アナグマは穴を掘るので力持ち、肩甲骨や腕の太い骨のこと、ハクビシンの長いしっぽの事、骨と骨を繋ぐ関節の様子など、多くを学んで帰られたことと思います。手足の骨部品を組み立てる作業では、どのご家族も苦労されましたが、ピタリとはまる仕組みに改めて感心しきりでした。



どれどれ、それぞれ

お世辞ではない「面白かった～」「楽しかった～」という感想が、各回共に寄せられました。博物館でしかできないこのプログラムは貴重ですから来年も続けたいと思います。

今回も哺乳類ボランティアさんの参加があり、参加者に熱い対応をしてくださいました。

普段動物に触れている方の存在は、参加者に良い効果をもたらします。来年は標本(はく製、内臓の保管などを含めて)作製の苦労の実態を参加者に伝えたい、との提案もありました。

友の会と学芸員さん学芸ボランティアの協同・交流を活発にして、友の会が市民科学の扉を開ける多くの企画を提供できると良いです。(赤堀千里)



きみも僕も真剣



足の骨組み立て完成！

活動報告（植物グループ）

◆植物観察会

「里山・北八朔公園に春の植物を訪ねよう」
2024年4月15日（月）／横浜市緑区／スタッフを含めて17名／講師：田中徳久館長／担当：植物グループ

今日は10人の参加者に、田中先生（館長）と6人の植物グループスタッフでした。青葉台駅からバスで10分ほどの北八朔公園でバスを降り、公園の外でさっそく道端にあったハルノノゲシ、イヌホオズキ、ハルジオン、ツタウルシなどの説明を受けました。少し坂を下ったところの石垣の斜面にたくさんのシロバナハンショウヅルが咲いていて、大変きれいでした。



シロバナハンショウヅル

それから階段を下って公園の中に入ったら景色が一変、きれいな森という感じになりました。

草地には、スズメノヤリ、ミミナグサ、ヤブタビ



ラコが観察でき、そこに生えていたキュウリグサとハナイバナの違いなどの説明

を受けました。

昼食後田中館長に公園の話と、谷戸（やつ、谷地）の湿地がどのように出来たか説明していただきました。午後の観察で山田さんがスマレについて詳しく話してくれました。

しばらく行くと左側にキンランがたくさんありました。花はまだ少し早かったが、つぼみをつけた姿は見ごたえがありました。それからまたしばらく行くとウワミズザクラが白いブラシのような花を木いっぱいに咲かせていました。サクラなのに、サクラの花のようでなく、不思議な木だと思いました。

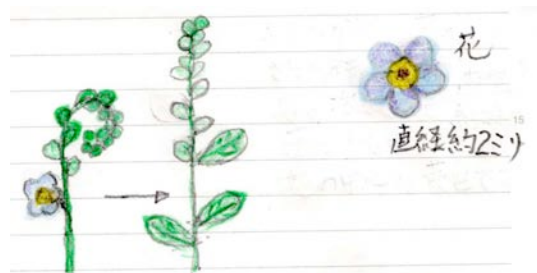


ウワミズザクラ

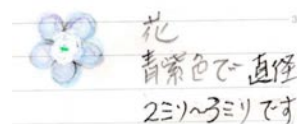
2時頃観察会が終わり、今日もいろいろな事を教えていただいて大変勉強になり、とても楽しい時間を過ごすことができました。

教えていただいたキュウリグサとハナイバナの違いは次の通りです。違いをスケッチしました。

キュウリグサは茎の先にサソリの尾の形をした薄青色の花を次々さかせるそうです。葉は少し丸みがあり、花の中心は黄色です。



ハナイバナは花が茎の上部の葉と葉の間に付き、茎や葉に毛が多いです。花は少し細く、花の中心が白です。



（佐藤 正俊）

◆植物観察会「身近な植物観察入門」

2024年4月27日（土）／博物館から吾性沢方面／
8名（スタッフ3名含む）／担当：植物グループ

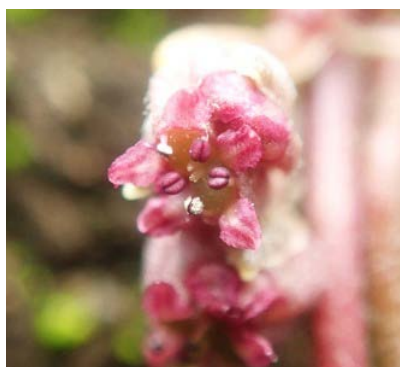
10時に博物館に集合したときは雨がパラついていましたが、ほどなく上がりました。

まず博物館の庭でツゲを観察。よく庭木にしているのは互生のイヌツゲでモチノキ科、これは対生でツゲ、またはホンツゲともいい、ツゲ科。よく見ると果実がついていました。イヌツゲのまん丸な果実より一回り以上大きく、先端には三本の花柱が角のように突き出て残っています。葉もイヌツゲに比べると少し草に近く柔らかく感じられました。マツバウンランがところどころにヒョロヒョロと伸びて紫色の花をつけていますが、例年より少ないように思いました。

ガード下から掘割のあたりでは色々なシダが見られました。ホウライシダ、クリハラン、コバノヒノキシダ、ノキシノブ、マメヅタなど。狭い坂道を上がっていくと、ペラペラヨメナの花盛りです。名前がかわいそうだけれど、結構きれいよね、と話しながら、、、オヤブジラミがもう果実になっていました。えっ、あの風ですか？との声が。巨大な風ですが、形が似ているからではなくて、衣服につきやすいところからきているようです。

突き当りの石垣にツボクサ（セリ科）が垂れ下がっていて、花や若い実が見られました。普段は地面を這った葉の陰で見にくいのですが、ここは見やすく、初めて花をよく見ることができました。といっても小さいので、写真で拡大してやっと花卉と雄しべ・雌しべを確認できました。

いつもの広い道にでると、タニギキョウ、ジロボウエンゴサク、キツネノボタン、シャガなどが咲いていました。シャガの花のつくりはどうなっているのでしょうか。



外来種でもあり沢山さいているので、一つ失礼して分解。外花被3枚に内花被3枚、3本に分かれた花柱の先に柱頭があり、そこから多数の白いヒゲのようなものが伸びています。雄しべが、分かれた花柱の

裏に張り付くように一本ずつありました。日本のシャガは3倍体のため種子はできず、根茎が這って一面に広がります。種子を作らないなら、なぜあんなにきれいな花を咲かせるのだらうという疑問の声がありましたが、故郷の中国には2倍体があり結実し、花色、花の大きさなど、いろいろ変化があるそうです。ミミガタテンナンショウは緑の若い果実ができていました。花茎が黒くなったおれているのは雄株なのでしょう。

マルバウツギも咲き始めていました。三週間前には花盛りだったヒメコウゾも雄花はほとんど落ちてしまって、赤い毛むくじゃらの若い実がたくさん下がっていました。すぐそばにヤマグワの木があり枝が交差しあって、やはり若い実がついていたので、一瞬はてな？と思われました。ヒメコウゾの実はまん丸で、ヤマグワの実はヒメコウゾよりは大きくて細長いので、両方の枝が混りあっていることがわかりました。ヒメコウゾはヤマグワと違って雌雄同株なのですね。

今日は博物館から駅付近は手早く通り、沢の少し奥へ行こうと事前に話していましたが、やはりいつも通り、上の道に行く前に時間になってしまい、



カキドオシの花

戻らなくてはなりません。帰り道ではカキドオシ（シソ科）の花を見つけました。ツボクサの葉の波形の鋸歯は角ばっていて、カキドオシは同じ波形の鋸歯でも丸みをおびていますが、本当によく似ています。花がないと間違えそうです。

入生田の駅に戻り、いろいろな発見があって楽しかった、との感想を聞くことができました。

（岩切千代子）

「高尾 日影沢の春」中止

2024年3月25日（月）に予定しておりました高尾（八王子市）での観察会は、雨天のため、中止としました。（友の会植物グループ）

行事案内

◆ 行事名：「2024年8月地話懇話会」

演 題：『岩石に残された変形の履歴』

話題提供者：当館学芸員 夏目 樹氏

日 時：8月21日(水)14:00～15:30

受付は13:40から

場 所：博物館1階 西側講義室

対 象：友の会会員

申 込：当日受付制（人数制限は設けません）

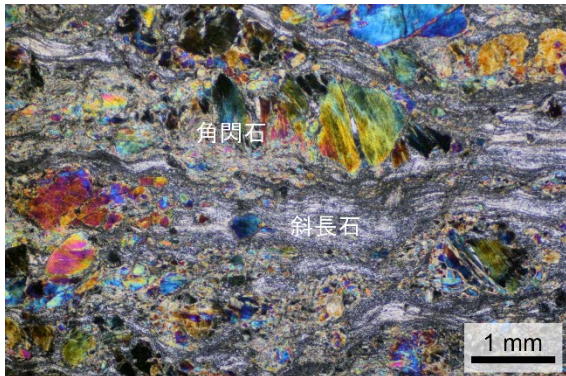
備 考：マスク着用については、個人の判断にてお願いいたします。

内容紹介（話題提供者より）

今年の3月に大学院を修了し、4月に着任しました地球環境担当学芸員の夏目樹です。大学院では変形岩や変成岩などを研究対象とした研究室に所属していました。岩石は地表付近では破壊により変形しますが、地下深くでは流動的に変形します。修士課程では海洋プレートを構成する地下深くの岩石の変形過程について、かつての海洋プレート断片が露出するオマーン国をフィールドにして研究を行ってきました。地話懇話会では自己紹介と共に、これまでの研究内容についてお話します。



オマーン国での調査風景



変形した岩石の薄片写真

◆ 第141回サロン・ド・小田原

演 題：「生命の星・地球博物館の30年と、
その未来像」

話題提供：佐藤 武宏 氏（当館学芸部長）

講演日時：9月7日（土） 14:00～15:30

受付は13:40から

場 所：生命の星・地球博物館西側講義室

対 象：オープン

申込み：当日受付制 先着順45名

参加費：無料

内容紹介

生命の星・地球博物館はまもなく開館30周年を迎えます。開館30周年という区切りの年に、これまで集めた資料を用いて、「集める」「調べる」「伝える」という博物館の活動を振り返る特別展 （7/13～11/4）を企画しました。

今回のサロン・ド・小田原では、

- (1) 博物館の30年間の歴史をお話した上で、
- (2) 実際に特別展を見ながら展示資料にまつわるエピソードを紹介し、
- (3) ご参加のみなさまにも、ご自身が考える当館の未来像を紹介していただきたいと考えています。

もう少し詳しい情報は、今後発信予定の博物館ホームページ、友の会ブログ等をご覧ください。

◆ よろずスタジオ

「巻貝の中をのぞいてみよう！」

巻貝のスライスした標本をみて中がどうなっているか観察してみよう。観察した後はクレヨンで写し取って記念に持ち帰ろう！

日 時：9月15日（日）13:00～15:00

対 象：どなたでも

申込み：不要／オープン

参加費：無料

場 所：博物館1階 東側講義室

◆ 植物観察会『身近な植物観察入門』

2020年から始まった博物館周辺を歩き身近な植物を観察する、初心者中心の気楽で楽しい会です。会員以外の方も大歓迎です。

日 時：9月28日・10月26日・11月23日

各月の第4土曜日です

(連続して出る必要はありません)

集 合：博物館正面 前庭 10:00

解 散：同所 12:00 頃

参加費：50 円 (保険料)

講 師：友の会植物グループ

対 象：オープン・どなたでも

小学3年生以下は保護者同伴をお願いします

持ち物：飲み物・雨具など (お持ちの方は虫メガネ・ルーペ等の拡大鏡)

申込み：友の会のWEB フォームで

申し込み開始は友の会通信到着後から

締め切りは下記電話の場合と同じ

メールを使わない方は各月担当者へ電話で

下記の期間内の18:00~21:00

・9/28 観察会：石橋 090-2159-4752

申込：9/23(月)~9/25(水)

・10/26 観察会：石井 080-6618-1467

申込：10/21(月)~10/23(水)

・11/23 観察会：小久保 090-4136-3025

申込：11/18(月)~11/20(水)

問合せ：上記電話申込み担当者へ18:00~21:00

(博物館には問合せないで下さい)

雨天その他の事情で中止の場合は、申し込んだ方に担当者から電話連絡いたします。

◆ 植物観察会

「森戸川でタニジャコウソウを見よう」

神奈川県内では、三浦半島と県西部に分布が限られるタニジャコウソウを見に、自然豊かな森戸川流域に行きませんか。シラキやケンボナシの果実、ムカゴイラクサ、イヌアワなどにも出会えるでしょう。



タニジャコウソウ

実施日：10月11日(金) 雨天中止

場 所：三浦郡葉山町 森戸川流域

集 合：JR 逗子駅 東口改札前 9:45

バスに乗車し、川久保下車

解 散：川久保バス停 15:00 頃

講 師：田中徳久氏 当館館長

対 象：オープン (どなたでも) 大人20名

参加費：会員500円 非会員700円

申込み：9月27日までに友の会のQRコード又はURLよりアクセスしお申し込みください。

メールアドレスの無い方は9月25日~

27日の19:00~21:00の間に電話で申

し込んでください。

電話申込先：佐竹 090-2329-1324

当日連絡先：佐竹 同上

石橋 090-2159-4752

*詳細はメール等でお知らせします。

友の会主催行事の参加申し込みについて

◆行事案内に申込み方法が指定されている場合は指定された方法(メール・電話等)にてお申し込みください。

◆WEBフォームによる申込は、下記QRコード又はURLからお願いします。

URL：<https://forms.gle/q2u4VAuVp7r8cc4y7>



注意！

■参加費は友の会会員1名分の金額で、内訳は資料代、傷害保険料です。それ以外のものは特記事項に記載があります。

■オープンの行事は会員以外の方も参加できます(参加費が会員とは異なる場合があります)。

■持ち物など詳細は返信はがきに記載されます

次号は、2024年9月15日発行予定です。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館友の会
Vol.28、No.1、通巻124号 2024.6.15 発行

編集：友の会広報部

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL：0465-21-1515 FAX：0465-23-8846

E-mail：kpmtomo@ybb.ne.jp

Blog：<http://blog.livedoor.jp/kpmtomo>

Twitter：@kpmtomo